

2020年2月24日

主査 宮原 哲

副査 オルソン、D. L.

副査 鳥越 千絵

博士学位申請論文審査報告書

蘭 紅艶

Kokusai Kekkon - A Qualitative Research Study on Intercultural Marriages between Chinese and Japanese

(国際結婚：中国人と日本人間の異文化間結婚に関する質的研究)

【研究の背景と概要】

日本の人口減少、高齢化、地方の過疎化などを背景に日本人と外国人との婚姻関係は珍しくはなくなってきた。ひと頃のような急激な増加傾向は見られないが、中国人を配偶者とする日本人の割合は、外国人との結婚を選択する人たちの中で最も高い。中国と日本はともに比較的集団主義志向が高いとされており、文化的な共通点が少なくないこともこの要因と考えられる。しかしながら、中国と日本とでは「似ているようで違う」部分も多く、結婚という深い人間関係を営む上では最初には気がつかなかった文化的な違いが、後になって意外な側面で現れ、夫婦の間の問題を複雑にすることもよく見られる。近年、日本人と中国人との夫婦の間での離婚率が上昇していることは「同じ」アジア人同士による婚姻関係の維持の難しさを物語っているといえる。

その一方で、恋愛、結婚は人生の大きな転機であるにもかかわらず、日本でのこれらに関するコミュニケーション学的観点からの研究はこれまでほとんど行われていない。日本人のコミュニケーション行動を研究するうえで使われている理論、概念、研究法のほとんどが欧米で作られ、試されたものであるという傾向は恋愛や結婚という大切な側面での研究にも当てはまる。国際的に見ても、日本人、中国人、韓国人を含む東アジアは「同じ」文化とさえ考えられており、これらの間の相違や類似に焦点を絞った異文化コミュニケーション研究や比較文化的コミュニケーション研究も数えられるほどしか行われていない。その結果、日本人も中国人もともに「面子を大切にし、相手との関係や周囲との『和』を尊ぶ、集団主義的、

相互依存型のコミュニケーション行動が特徴的」という乱暴な特徴づけが認められているほどである。

このような背景の下、蘭紅艶は自分自身が日本人の夫との結婚生活を 10 数年にわたって続け、そこで得た経験、特に夫やその家族との誤解や対立、また明らかに中国とは異なる周辺、特に地域との関係からさまざまな「挑戦」の機会を与えられ続けてきた。今回の研究は「これは私だけの問題なのだろうか。他の中国人妻は私と比べて似た経験をしているのだろうか。つらい経験をした際、どうやって困難を乗り越えてきたのだろうか」といった個人的な、素朴な疑問が出発点となっている。これらの課題に対してコミュニケーション学の立場から行われた研究がたいへん少ないこともあり、また蘭自身がこれまで行ってきた研究は解釈学的なものであり、原因と結果の間の因果関係を探ったり、仮説を検定したりするものではないこともあって、今回はまず他の中国人妻と話をし、それをインタビューという形に作り上げ、そこから得られるデータの中に見出される何らかの傾向、つまり「理論」を導き出そうという、グランデッド・セオリー・アプローチ（以下、GTA）を採用した。したがって先行研究調査に基づいた疑問点に解答するという方法ではなく、インタビューという生きたデータに基づいた、入念で膨大な時間と労力を要する質的研究に取り組んだ。

第 1 章は論文全体の紹介、第 2 章で日本での国際結婚、特に配偶者のいずれかが日本以外のアジアの国の出身者である場合の近年の状況を説明している。第 3 章を蘭は研究方法 (GTA) の説明、議論に当てている。多くの研究ではここで先行研究の紹介を行い、そこから導き出される研究課題 (Research Question) や仮説を示すのが一般的であるが、本論文では GTA の考え方に基づき、「まずはデータ収集」という順番で進めていることが特徴的である。第 4 章は 60 ページにわたって中国人妻へのインタビューから得られた結果を丁寧に描写している。その上で第 5 章から 7 章にかけて、インタビュー結果から導き出されたテーマ、結婚観、アジアでの異文化結婚の比較、そして対立、面子に関する理論がこれまでいかに西洋偏重であったか、という議論を展開する文献の調査結果をそれぞれ示している。第 8 章で考察、第 9 章で結論を述べている。インタビューは逐語録を最初に中国語で作成し、それを英語に翻訳した。10 人のインタビュー逐語録をすべて掲載すると、それだけで数百ページになるため、「サンプル」として一人分だけ示すこととした。参考文献リストだけでも 30 ページ近くとなる、GTA に基づいた研究の特徴を示している。また、本論文は正確な英語で執筆されており、蘭が中国語のほかに英語と日本語を自由に使う能力を有しているという利点を効果的に発揮した結果であることも評価の対象として加えることができる。

【本研究の評価】

本論文で特に高く評価できることは主に次の 3 点に集約できる。

1. 著者である蘭紅艶自身が中国出身で、日本人男性と結婚し、自分自身の経験が基となって今回の研究を行ったこと

質的研究の大きな特徴として、研究者と研究対象とが主観的關係で結ばれ、「客観性」や「再現性」などを重要な柱とする実証主義 (empiricism)、還元主義的 (reductionism) 哲学に基づいた量的研究との最も明確な相違を挙げることができる。その中でも今回の蘭紅艶の 10 名

の、日本人の夫を持つ中国人妻への綿密な半構造インタビューを行ったことが本論文の最も評価されるべき特徴といえる。

蘭自身が日本人男性と結婚し、2児を儲け、同時に常勤の大学教員という立場を維持しながら日本で生活をしてきた中で、夫との関係、夫の家族との関係、地域社会との関わり、子育て、そして日本の大学というある種特殊な環境での生活を送ってきた。母国中国では高い学歴を持ち、米国企業で働く中国人従業員に英語を教えるという、いわばエリート的なキャリアを持っていた蘭が、来日以降さまざまな異文化の軋轢とも言える社会生活で味わってきた衝撃的な経験のほとんどが夫婦の関係に起因しているとも言える。そこで得た「これは自分だけに起こっているのだろうか」、「他の日中の夫婦は、もし対立が起こったらどう対処しているのだろうか」、「中国で生活する日中の夫婦も同じような思いをしているのか」、「もし、どうしても夫婦の問題を解決できない場合、離婚という道を選ぶ過程ではどのような葛藤や思いを抱くのか」といったきわめて個人的ではあるものの、研究を始め、それを維持できるだけの潜在的な推進力を持った疑問に答を出そうという、蘭自身の深いところから湧き出た素朴な探求心が今回の研究を長い時間かけて最後まで押し進めてきた。

「なぜ」、「二つの事象の間にはどんな関係が」といった因果関係や相関関係を解き明かす量的研究ではなく、あくまでも今起こっていることを明らかにし、自分自身の言葉に置き換えて描写し、また起こっていることとそれ以外の文脈で起こる文化的影響を受けたコミュニケーション行動を考えてみるための解釈を目的としている本研究では、研究者の個人的なものの見方、調査の方法、結果の解釈・分析こそが質的研究の中心を占める強みである。その意味でも時間をかけて、それぞれのインタビュー協力者に夫婦の関係という、あまり他人に話したことがない、話したくないことについて多くのことを語ってもらうことができたことは、研究者、インタビューアーとしての蘭紅艶の「個」が鋭く反映されていることを物語っている。

2. これまで日本をはじめとするアジアでの結婚についての研究はほとんど行われておらず、「同じ」アジア人として括られる中国人と日本人との間での結婚関係についての研究を行ったこと

コミュニケーション学のアジアでの歴史は浅い。結婚という本来ならば大いに研究課題となり得る人間の営みについてのコミュニケーション学の視点からの研究はほとんど行われていない。したがって、今回インタビューの後 GTA の研究哲学に則って行った先行研究調査で用いられた文献はすべて欧米の研究者によるものである。中国人や日本人の結婚以外の対人関係に関する異文化比較の研究はある程度行われてはいるが、その中では「米中」、「日米」、「韓米」という具合に、一つのアジアの国と欧米、特に米国とを比較する研究が圧倒的多数を占めている。欧米のコミュニケーション学の研究者はあたかも「アジアは一つ」とさえ考えているのではないかと思われるほどである。

このことは単に欧米の研究者の傲慢さを示しているのではなく、アジアの研究者が十分に自分たちの文化的特色を帯びたコミュニケーション行動や哲学について研究を行ったり、行ったとしても国際的な学会や論文を通して明らかにしてこなかったりといったことが原因と

考えられる。このような状況で、最初から異文化比較できる要因 (etic) を導き出そうとする代わりに、まずは自分の文化の中だけで意味を成す要因 (emic) を明らかにしようとしたのが本研究の貢献といえる。たとえば、「面子」というもとは中国から来たと思われる概念だが、日本で言う「メンツ」とは明らかに違っていることが今回の蘭の研究で明らかにされた。日本人も中国人も、大半の欧米文化と比較すると「集団主義志向」が強く、欧米の主流である「独立自己観」に対して「相互依存型自己観」を持つ人が多いとされている。そのコミュニケーション行動の特徴として、「高コンテクスト・コミュニケーション」や、「ウチとソトとの区別」が挙げられる。しかし、本研究で蘭が主張する大きな日中の違いの一つが、「中国人の方がウチ (ingroups) のメンバーへの依存の度合いが、日本人よりもはるかに高く、そもそもウチを構成するメンバーに対する認識が中国は家族、隣人であるのに対して、日本は仕事仲間であるという相違を見つけることができたことは大きな貢献といえる。また、日本人の夫と比べて、中国人妻は「思っていることをはっきり言う」という「同じ」アジアの高コンテクスト・コミュニケーションの特徴を共有するとされてきた日本と中国との間の興味深い違いを見ることもできた。

同じアジアなのだから当たり前と考えられてきた日本と中国との間の、すぐに目立ちはしないものの深く付き合っただけで初めて目にすることができるコミュニケーションの違いをいくつも明らかにできたことは、今回の研究による成果ばかりではなく、今後のアジアでのコミュニケーション研究にとって明るい材料を提供してくれたと評価できる。

3. コミュニケーション学の領域ではこれまでほとんどの理論、概念、研究法が欧米主導で行われてきたため、欧米の文化の枠組みが取り入れられ、そこでの考え方が欧米ではない文化に無理にあてはめられてきたが、今回のような研究結果が欧米で「一般的」と考えられていることがアジアにはそのままでは当てはまらないことを示すことによって、アジア的、あるいは日本的コミュニケーション理論を構築する一歩となる研究を行ったこと

これまで欧米主導のコミュニケーション研究が「主」で、その他は「副」と考えられてきた。たとえば、自分の深い感情や過去の経験（特に負の出来事）についてアジアの文化では外に出さずに自分の中に秘めることが多いが、これは欧米では「コミュニケーション能力、特に自己開示能力の不足、欠落」とさえ考えられる場合が多い。確かにそのような可能性もあるかもしれないが、少なくとも日本人は「周囲の『空気』を読んだり、相手との関係に気を配ったりした」結果、あえて自分の内面を明らかにしないという、むしろ自分を開かずにおく「能力」と位置付けられる。

欧米主導のコミュニケーション理論、概念、研究方法を欧米以外、特にアジアの文化に無理やり押し付ける代わりにアジア独自のコミュニケーション理論を確立するには、今回のような研究を一つひとつ積み重ね、得られる知見を検証することによってその集大成としての理論を築くことが求められている。質的研究によって得られる概念を組み合わせ、コミュニケーション学以外の領域、たとえば文化人類学や心理学などの「近隣の」分野で得られている結果なども複合的な研究を繰り返して検証可能な仮説を打ち立て、実証研究を通して一

般化できる理論を編み出さなくてはならない。その長い過程の一步として、今回のような日本人の夫を持つ中国人妻の心の深いところに入り込んで経験的な、そして地道な研究を実践することが不可欠である。

まだこれから歩むべき道のりは長いものの、蘭紅艷が一研究者としてその道を歩み始めたことを示すうえで、本論文は彼女が今後独立した研究者として多くの知見を集め、検証し、統合して日本、中国などのアジアのコミュニケーション理論を確立するための研究活動を始めるに十分な準備ができていることを示している。

よって、この博士号学位請求論文は、蘭紅艷に西南学院大学文学研究科英文学専攻、コミュニケーション学専修において博士号を授与するに十分な資格を満たしているものと評価することができる。